

## 細川俊夫／月夜の蓮～モーツァルトへのオマージュ～

2006年、モーツァルトの生誕250年を記念して、北ドイツ放送は4人の作曲家に新作を委嘱した。条件は一人ひとり別々のカテゴリーを指定して、カップリングで演奏するモーツァルトの曲を選び、それと同じ楽器編成で新作を書くこと。細川俊夫（1955-）は「ピアノ協奏曲」から選ぶことになり、第23番イ長調をピックアップした。今日もこの組み合わせで演奏される。

「月夜の蓮」というタイトルに表現されているとおり、ここでは花がテーマになっている。1998年の弦楽四重奏のための《沈黙の花》から、細川はこのテーマをゆっくりと具体化していく。「私の祖父は、いけばなの師匠であったこと。私の愛する日本の伝統演劇「能楽」の創始者世阿弥にとって、最高の演技者は「花」ととらえられていたこと。日本の伝統詩歌にとって、「花」は最も重要なテーマであったこと。そうしたことが、私を「花」への関心に向かわせた」と、細川は述べている。

蓮の花は水から上に開花することから、水平の水面が音楽の前提となり、音楽は旋法的な響きのなかで展開される。「静かな明るい月夜、蓮の花は蕾のまま、月光を受けて、開花に向かって、夢にまどろむ。その夢の中には、かすかにモーツァルトの音楽への憧れ（西洋音楽への憧れ）が託される」（細川）。曲頭でピアノは1つの音が落とす影のような和音を、少しずつ変容させながら、静かに重ねていく。モーツァルトの緩徐楽章をほのめかす嬰へ音が弦合奏によってドローンのように続いていくなか、しだいに音の密度が高くなり、2つの大太鼓がトレモロや楔のように打たれる反復音によって、ドラマティックなうねりを作りだす。ピアノのカデンツァが開花に誘われる蓮に象徴される一種の情念を、スタティックな静けさのなかで表現したのち、再びオーケストラとの交感が行われ、終盤でオーケストラの生み出す神秘的な音響空間のなかでモーツァルトのフレーズが夢想しているかのごとく、引用される。

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

白石美雪